

# 教育長室だより

第 37 号

2022.11.10

しばらくぶりの投稿となってしまいました。暑さが去りやっとなつたかと思えばもう暦の上では冬。短い秋を経てこのところの朝夕の寒さは確かな冬を感じさせます。

新型コロナ感染は8月下旬から9月初めをピークに収束してきていましたが、ここに来てまた増加傾向が見られます。学校行事をはじめ様々な社会的な行事もおおむね再開の機運ですが、人の動きが増すこともあり、まだまだ油断できない状況です。



さて、今回は学校教育の未来について考えてみます。

この話題を選んだ経緯として、教育新聞10月24日号のコラムの内容がありました。

以下、そのコラムの内容を要約してみます。

『未来予測はよく外れるが、確実だと思われる予測がある。』という記述からはじまります。何が確実な未来なのか。

『今の小・中・高生の半数は百歳まで生き、80才くらいまでは働かなければいけない。AI等の発達で短い間に人間の仕事が様変わりし、新しく生まれてくる仕事に挑戦し続けなければならない。そして工業化社会(Society3.0)や情報化社会(Society4.0)に適していた今の学校教育にはメスが入るに違いない。』ということです。

これに近い話題や意見はこれまでも聞き及んでいますが、あらためて突きつけられるとなかなかのインパクトがあります。記述にはいくつか注目点があります。



まず今の子どもたちがかなりの割合で百歳まで生き、80才まで働かなければならないという予測は、ここ数十年の経緯からも十分に妥当と考えられるでしょう。また、AIの発達による人の労働の変化についても以前から指摘されているところではあります。

問題はその次で、今の教育が工業化社会(Society3.0)や情報化社会(Society4.0)に適した教育であるという指摘です。言わずもがなで、公教育は社会の要請に応える部分が初めからありました。

今、社会はSociety5.0(超スマート社会)を迎えようとしていると言われてます。超スマート社会というのはわかりにくい概念ですが“仮想空間と現実

空間を高度に融合させたシステムにより経済発展と社会的課題の解決を両立する人間中心の社会”という言い方で説明されます。

○

ここからは新井紀子『AIvs教科書が読めない子どもたち』からの受け売りを交えて時代の変革の怖さを少し述べます。

かつてSociety3.0と言われる工業化社会が始まった頃、おもしろい映画が作られました。それはチャップリンの『モダンタイムス』です。オートメーションの流れ作業の中で葛藤する人物が描かれています。

労働者としてはブルーカラー（肉体労働者）が中心だったその時代、オートメーションの発明によってブルーカラーは仕事を奪われ、大量のホワイトカラー（事務労働者）が必要となったが、それまでホワイトカラーとしての教育を受けていない大多数の労働者が失業し、これが第二次大戦の引き金となる大恐慌につながったという歴史が背景にあったという話です。企業の人手不足と大量の失業が同時に起こったと…。

○

今、Society5.0（超スマート社会）という新しい社会に入っていくとして、わたしたちは教育内容を変える必要があるのかもしれませんが。先のコラムにあった「教育にメスが入る」というのがこのことを指しているようにも思えます。

教育の内容と共に学校教育のあり方には早い段階でメスが入るのではないかと思います。しかし、その場合は十分な議論も必要だと思います。誰か少数の考えで一方向的にまた急速にメスを入れるのは問題だと感じます。拙速は危険です。

「読解力」とか「コミュニケーション力」など、今の教育でも重要なものとして強調されるようになりましたが、これらについてはおおむねコンセンサスかできているだろうと思います。これらも新しい社会で必要とされる人の能力を指していると考えられます。

○

子どもたちにどんな能力を育てるべきかは教育にとって重要なテーマですがこれは時代と共に変わる部分があることも確かです。しかし、一方でどんな時代にも絶対に必要な基本的な資質があります。それは本当に大切な教育の目標になります。教育の「不易と流行」の意味がここにあります。そしてまた何を身に付けさせるかという「内容」と同時にどのような方法で身に付けさせるかという「方法」も大事です。今の学校教育にメスが入るとすればこの「方法」の部分に大きく関わるものだろうと思います。